
オトシボシ

ノラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オトシボシ

【Nコード】

N0938E

【作者名】

ノラ

【あらすじ】

2050年、新生都市『星都』は、今やオトシボシと称される犯罪地区へと堕ちた。オトシボシで妹のマジュと暮らすミアキの元へ、ある日突然一人の少女と一匹の灰猫が現れ、ミアキは世界の本当の姿を知る。

第1話：カイマク

「…悪い。今なんつった？」

ホットミルクにハチミツを大量に流し込み、綺麗に装飾された銀のスプーンでかちゃかちゃとかき混ぜる。立ち昇るあまい香りに眠気が増した。やはりここはコーヒーにしておくべきだったか？とびきり苦いやつに。

「だ・か・ら！最近変なウワサが学校中で流れてるの！オトシボシの方でゾンビが出たとか、でっかい昆虫オバケが人を襲ったとか！」

くるみ色の長い髪を揺らしてヒスイが俺に詰め寄った。

その目は実に真剣で、冗談を言っているようには到底思えないのだが…話の内容が内容だけに、俺は彼女の言葉を話半分で聞いていた。人の噂なんてものは大概あてにならない。現にヒスイの話は小学生にさえ鼻で笑われそうなB級ホラー映画なみのチンプな内容だ。ゾンビ？巨大昆虫？そんなもんがいるならぜひ拝んでみたいもんだね。

「はいはい、分かったからお前は弟の勉強の邪魔にならないようにそこらへんで大人しくしてなさい。もしくは俺のタバコでも買ってきなさい。」

ぽんぽんとヒスイの頭を叩く。実に軽そうな音がするぞ。大丈夫か？

「なによ、全然信じてないくせに！水晶^{ミアキ}なんか糖尿病か肺癌にでもなっっちゃえばいいのよ、この甲斐性なし！」

「…このやろ、言わせておけば…」

と、俺が言い掛けた頃にはすでにヒスイの体はドア付近にあり、憎たらしげにあっかんべー的なポーズをとっている。次の瞬間、ドアは乱暴に閉められた。

部屋全体が静寂に包まれる。ちらりと壁時計に目をやると、時刻は22:00をまわったところだった。

「あーあ。ミアキ先生ってば、また姉ちゃんのこと怒らせちゃった。駄目だよ、姉ちゃんは今思考回路が単純なんだから。感情の起伏も人より激しいって、先生も知ってるでしょ？」

整頓された勉強机に腰掛けた少年が、困ったように笑った。

ヒスイと同じ色の髪は猫ツ毛で、やわらかそうにふわふわと揺れている。俺が家庭教師として週2回ほど教えている可愛い教え子だ。名前はコハク、小学5年生。

「もちろん知ってるさ。怒るのも冷めるのも早い。だからこそ…おもしろい。」

「…先生って、時々子供みたいだね。」

ニコニコ顔のコハクは急に真剣な顔つきになると、握っていたシャープペンを広げたノートの上にことりと置いた。

「でも、姉ちゃん本気で心配してるんだよ。あんなふうになんか強がるけど。オトシボシって、ミアキ先生が住んでる地区でしょ？最近はずまず治安も悪くなってるみたいだし、先生は強いから大丈夫かもしれないけど…その…姉ちゃん、先生のことか」

遮るように、俺はコハクの頭に手のひらをのせる。

「ああ、分かってるよ。コハクやヒスイには感謝してる。けど、余計な心配は無用だ。もうすぐテストだろ、今は勉強に集中しろよ。でないと俺がご両親に顔向けできんからな。」

「はい」

こくと頷いたコハクは、再び問題集に取り掛かった。その小さな後姿が、なんとも頼もしく感じた。

23:00。

いくら家庭教師のバイトとはいえ、相手は小学生。夜更かしはよくない。定時に帰路へとつこうとする俺を、コハクとその母親が玄関先まで見送りにきてくれた。

「おやすみなさい、ミアキ先生。」

「おやすみ、コハク。それじゃ、失礼します。」

コハクと、傍らで微笑む母親にぺこりと一礼する。ドアノブに手を掛ける。がちやり、冷たい金属音。

「！」

玄関のドアを開くと、そこにヒスイの姿があった。何か言いたげにじっと俺を見つめている。

さては、まださっきのことを怒っているのだろうか？

「…風邪ひくぞ、んなとこにつつ立つてると。」

季節は夏の終わり。まだまだ暑い日が続くが、夜は結構冷え込む。家に入るように促した俺に、ヒスイは首を横にふった。唇が微かに開かれる。

そうして、搾り出すように言葉を発した。

「ちょっと、付き合ってよ。」

俺の返答も聞かずに、ヒスイはさっさと歩き始めた。夜道を一人で歩かせるわけにもいかないの、しかたなく着いていくことにした。

第2話：虚

青と白の光を放つ外灯が等間隔に並び、閑散とした公園を取り囲んでいる。

今夜は月が一段と大きいせいか、もういい時間だというのに思いのほか辺りは明るい。ただ、園内に人影はなく、不気味なくらいに静まり返っている。

小高い丘に切り開かれたこの場所から一望できる喧騒と蛍光色のネオンの群れ。オトシボシとこの町とを繋ぐ鉄橋。山ほどのガラス片を散りばめたような美しさ。

けれどどこか忙しく感じる。競うように進化し続けてきた無機質な高層ビルたちのせいだろうか。

「…っ！」

突然、ノイズ音と共に視界がブレた。こめかみのあたりが鈍く痛む。光に目が眩んだわけじゃない。最近よく見るようになった、短い、夢の断片のような映像。

それがまた、俺の脳髓を刺激したのだ。

紅い眼。

蜘蛛のような脚。

壁一面に飛び散ったどす黒いペンキ。いや…血液か？

銀系に似た灰色の毛並み。

横倒しになったイーゼル。

意味不明なそれらの静止画が次々にフラッシュバックする。気分が、すこぶる悪い。吐き気すら覚える。

「ミアキ、こつち！」

ヒスイの声に我に返る。どれくらい、夢を見ていたのだろう。

羽虫の集る外灯に照らされた鉄製のベンチに腰掛けたヒスイは、俺にも隣へ座るよう手招きした。ひんやりと冷たいベンチの感触に胸の動悸が徐々に治まっていく。

「つくしゅ」

ヒスイは自分の肩を抱くようにして身を引き寄せると、ぶるりと身震いした。

ほらみる、そんな薄着してるからだ。若さも夜の冷え込みには勝てないってことだな。例えこの温暖化社会においても、だ。

「着てろ。」そう言って、俺は上着を脱ぐとそれをヒスイの前に突き出した。

「あ、ありがと。」

キャミソールとミニスカートから覗いた白い肌が寒々しい。

ずっとガキだとばかり思っていたが、最近の子供は発育が著しいようで…正直目のやり場に困る。

ヒスイは俺が発する『ガキ』という単語に異常なまでの反応を示すので、このごろは使っていない。ま、そういうところがまたガキたる証拠なのだが。

「どういたしまして。」

おずおすと上着を受け取ったヒスイはさっと肩に羽織ると、爪をた

てるように自らの腕をぐつと握りしめた。
まるで苦虫でもかんだような顔をしてやがる。

「どうして…あんな場所にこだわるの。」

途端に、周囲の空気が張り詰める。

嚙締めるように、ヒスイは俺を暗に責めた。

「こっちに引つ越せばいいじゃん。あたし達家族も、おじさんだつてきつと協力してくれるよ！もし、学校みんなにオトシボシに住んでることがばれたら面倒だし…っていうか多分、差別とか、いろいろム力つく事とかあるだろうし。マジユちゃんだってそのほうが」
なるほど。

妙に深刻な顔つきだと思ったら、その話か。

今までも何度か口にした、その言葉を今度も俺は口にする。

「それは出来ない。」

「だから、どうして！」

ベンチを叩きつけるように立ち上がったヒスイの、鋭い眼光が俺を射抜く。

だめなんだ。

出来ないんだよ。マジユ自身がそれを望まないかぎり。

オトシボシがこの国にとっての掃き溜めでも、あいつにとってはとても大切な場所だから。

第2経済都市、星都^{せいと}。十数年前の大規模災害とそれに続く暴動により都市機能はほぼ壊滅。今となつては警察の無介入をいいことにマフィアやら犯罪者やらの巢窟となり、治安は悪化の一途をたどっている。

かつては新星と称された巨大都市は見る影もなく、文字通り墮ちたといえる。

それが無法地帯、オトシボシ地区だった。

詳しい経緯^{いきざつ}は俺も知らない。とにかく、オトシボシを離れるわけにはいかないんだ。マジュは俺が守ってみせる。今までも、そしてこれから。星の逝去とともに蒸発した両親の分も、俺が必ず。

月が雲間に消えた。

急激に空気が冷えた気がした。血の一滴まで凍てつかせるかのように。

「…そろそろ帰るぞ。お前、明日も学校だろ？」

ヒスイのビー玉のような瞳が淡く揺らめく。

「ヒスイ、俺の勝手ついでに一つ頼まれてくれ。マジュを…俺の目の届かない所ではお前が守ってやってくれ。あいつは辛くても耐えて気丈に振舞っちゃまうくせがあるから。おまけに自分が擦り切れる寸前までそれに気付かねえんだ。」

真珠^{マジュ}は7つ年の離れた俺の妹。

中高一貫の学校に通う、中等部2年生。高等部の3年生であるヒスイの後輩だ。2人の通う学校はオトシボシに隣接するこの町の一角

にある。

送り迎えは俺がしている。この町はともかく、橋を越えてからはマジュ独りで歩かせるにはあの地区は危険すぎるからだ。

俺は昼間は酒屋、夜は週2の家庭教師のバイトを掛け持ちしている。マジュを見守るにも限度がある。

その点、何かとマジュを気に掛けてくれているヒスイには密かに感謝している。

小休止。のち、すうつと息を呑み込む音。

「そんなの当たり前じゃん！伊達に空手部主将はやってないよ！変質者だろ？うがなんだろ？が返り討ちにしてやるっての！」

そう言っつて、ヒスイは胴着の帯を締めるような仕草で悪戯っぽく笑った。

「ああ、ありがとな。」

にやり、ヒスイの口元が歪んだ。

「その代わり、今度シャトロローザのフルーツタルトと船越屋のイチゴ大福、ご馳走してよね」

「……ヒスイ君、誠意ってナニカネ？」

月が、再び顔を出していた。

二人並んで公園を後にした。密集した住宅街の路地を引き返す。

ヒスイを自宅まで送り届け、そして別れる間際になって、ほんの一瞬だけ彼女は寂しそうに俯いた。

「ミアキ。あんまり、無茶しないでよね？」

「あ？」

「な、なんでもない！おやすみ！」

それだけ言うと、ヒスイは後ろ手にドアを閉めた。

バタバタと階段を駆け上がっていく足音。

「…変なやつ。」

再び静寂が戻った。

「さて、帰るとするか。」

近所のコンビニにであいつの好きなプリンでも買って行ってやろうか。

なんだっけ？黒ゴマのやつ？あ、ついでにハチミツも買って帰ろう。
切れ掛かってたんだ。

俺はポケットから相棒のエンジン起動キーを取り出す。静かにエン

ジンをふかす愛しいフォルツァに跨り、夜空を見上げた。

第3話：石たちの対談

23：55

鉄橋を奔りぬける。

しばらく道なりに進むと、居住者など皆無に等しい人気のないマンションのひび割れた壁が見えた。

エンジンを止め、見慣れたマンションを仰ぐ。

どこにでもあるような何の変哲もないマンション。だいぶ老朽化が進んでいるのか、くすんだ壁には植物のツルが繁茂している。どの部屋の窓にも電気はついていない。

南北に長い2棟建てのマンション。

手前の棟の3階、一番南側に位置する部屋にも…明かりはない。

『珍しいな？マジユのやつ、いつもはまだおきてるのに。』

コンビ二袋を抱えてカビ臭い階段をのぼる。上着のポケットを手探りし、玄関の鍵を取り出す。

ちりん。

マジユが鍵に括りつけた鈴が鳴った。

そのまま取り出した鍵を鍵穴へさそうとした手が…止まった。

ドアがない。

開いている、とかそんな生易しいものではなく、まるで空間そのものにぽつかりと穴があいたかのように綺麗になくなっている。

思うより先に体が動いていた。

嫌な予感がする。

体の末端は氷のように冷たく、心臓は焼ける様に熱い。

焦燥・動揺・警鐘。

「真珠… ツー!!!」

土足のまま廊下へあがる。普段ならこんなこんなことをすればさずマジュにどやされるのだが、今日だけは例外だった。手狭なキッチンを通り過ぎ、奥のリビングへと踏み込む。

12畳ほどの薄暗い室内は、異臭とも腐臭ともつかない臭いに満ちていた。

空気が澱んで重みを増しているようだ。

思わず反射的に口元を覆っていた。

徐々に目が暗闇に慣れていく。

見慣れた部屋の輪郭がおぼろげに浮かび上がる。

結果。

そこにマジユの姿はなかった。

代わりに俺が目にしたもの…

割れた窓ガラス。

吹き込む風になびく引き裂かれたブラインド。

床に散乱した備品。

横倒しのイーゼル。

壁に飛散した光沢を放つ液体。

どれもこれも、どこかで目にしたような光景ばかりだった。デジャヴ、というやつか？

きん、とこめかみが痛んだ。また、あの感覚だ。

嫌な汗がじわりと全身から噴きだすのがわかった。

突風が吹き込んで、かろうじて繋がっていたブラインドを引き裂いた。俺の両目が何かを捕らえた。

むき出しのコンクリートの壁に囲まれた部屋の中心。

それは青白い月光を背にたたずむ少女の肢体だった。

「…遅かったな。」

紅い双眸が闇に浮かぶ。

炎を宿した少女の瞳がゆっくりと俺に注がれる。

「誰だ…てめえ…」

聞きたいことなど山ほどあった。だが、今はそれしか言葉が出てこない。

「私は、」刹那の沈黙のあと、少女は僅かに唇を開いた。「ルチルクォーツ。この世界、ファーストを統括する組織に属する者。」

何を…言っている？

こいつは一体、何を？

無意識に俺は壁を殴りつけていた。酷く混乱しているせいかもしれない。頭に血が上って、感情をコントロールできない。

「今の俺は…冗談に付き合ってやれるほど冷静じゃねえ…!!」

「私は冗談は嫌いだ。」

表情ひとつ変えずに、少女は淡々と言い放つ。
ピリツつと、空気に亀裂が走った気配がした。

「まあ落ち着きたまえ、黒髪の青年。…確かミアキ君と言ったかな？それからルチル、彼の神経を逆撫するような言動は控えるべきだと私は考える。」

低い、男の声が聞こえた。
だが、姿が見えない。

どこだ！？

「ここだよ、ミアキ君。」

「！」

ルチルクーツと名乗った少女の足元、彼女の影から溶け出すように現れたそいつに、俺は目を奪われた。

銀系に似た灰色の毛並みの猫。

挑発するかのように、ゆったりと長い尾を翻している。

「さて、何から説明しようか。とりあえず最初からかな？」

その方が手っ取り早い、猫はそう言って口角を吊り上げて笑った。

第4話：追憶

赤い記憶がある。

夕暮れに染まる部屋。テーブルの上の熟れた果実。

俺が8つの時、マジユはまだ赤ん坊だった。

やさしい両親に囲まれ、何不自由なく暮らしていた。

星都のはずれにあるごく平凡なマンションの一室。

そこが俺にとって世界の中心であり、すべてだった。だが…

ある日突然、置手紙一つ残して両親は姿を消した。

何の前触れもなく、俺たち兄妹の前からいなくなった。

星都が大災害と暴動によって崩落した直後だった。

2日ほどして、伯父だと名乗る男がマンションを訪ねてきた。蛇のような目をした感じの悪い男だった。

伯父は俺とマジユを車に乗せると、何も言わずにマンションを後にした。

俺たち2人の後見人となった伯父夫婦とは何かと反りが合わなかった。

もともと両親の残していった金が目当てだったようで、まともに世話を焼かれた記憶がない。

マジユの面倒をみながら学校へ通った。

夜は夜鳴きがうるさいからと殴りつけられ、食事すら与えられない日々が続いた。

けれど感傷に浸っている余裕はなかった。

マジユのため、自分のため。

ただ、悔しかった。

ストレスのはけ口として理不尽に暴力へと訴える伯父。

それに対抗できない非力な自分。

何も語らず姿を消した両親。

俺がマジユを連れて新居を飛び出すまでにたいして時間はかからなかった。

幸せだった頃の思い出に縋り付いて、ひたすらマンションへの道のりを歩いた。

春の長雨。

空腹と疲労で動けなくなった俺は泣き止まない曇天を仰いで冷たいアスファルトに身を預けた。

マンションまであとどれくらいだろう？

なくなっただけはないだろうか？

もしそうだったら、もうどこにも行くあてがない。

朦朧とする意識の中、誰かが俺の体を抱き上げる感触がした。久しぶりに味わう誰かの体温。

「こんなところで寝てると風邪ひくぞ、ガキ。」

父親とも伯父とも違う、初めて耳にする声。

大きな手のひらのごつごつした手触り。とてもあたたかい。けれど…

「…酒クサイ…」

ぽつりと呟いた俺に、男は豪快に笑い返した。

それが、フクログジュ福祿寿との出会いだった。

青い記憶がある。

真っ青な空の下。それ以上に真っ青な海。

買ったばかりの相棒でドライブした帰り道、浜辺で一休みする俺とマジュは潮風に吹かれ、蒼穹を仰いでいた。

「ごめんね、お兄ちゃん。」

「？　なんだよ、いきなり。」

「ん、うん…」

マジュは困ったように俯いて、自嘲気味に微笑んだ。

「お兄ちゃん、わたしの面倒をみるのが忙しくって自分の時間がほとんどないでしょ？お兄ちゃんかっこいいんだし、もしわたしがいなければ彼女とか作れて、もっと自由に…」

また始まった。

マジユの悪い癖がでた。困ったもんだ、まったく。

「あほたれ！」俺はマジユの頭を手のひらでぐしゃぐしゃにかき回す。「お前がいなかったら、誰が俺に特製八チミツ井を作ってくれるんだよ？」

「あれ…そんなにおいしい??」

「絶品だね。」

くすり、とマジユが笑った。

「そつか。そつかあ…」

うれしそうに何度も何度も呟いた。

その笑顔が、とても愛しかった。

いつか、2人の安全のためにもオトシボシを離れようと相談したことがあった。

けれどマジユはそれを受け入れなかった。

両親の記憶などほとんどないマジユにとって、あのマンションだけがかけがえのない思い出だったのだろう。

もしかしたら、あそこにいればいつか両親が戻ってくると思っているのかもしれない。

だから俺はオトシボシを捨てられない。

例え危険な場所であろうとも。

俺は強くなって、マジユを守り続ける。

そう、誓った。

第5話：共同戦線

00:20

ライトのセンサーが今さら人の気配を感知したのか淡く発光を始めた。

と同時に、おぼろげだった3つの影が光のもとにあらわになる。

「まずは自己紹介しよう。私はラブラドライト。彼女はパートナーのルチルクォーツだ。先程は驚かせてしまったようで、申し訳なかったね。」

灰色の猫がぺこりとお辞儀してみせた。

ロシアンブルーに似た、すらりとした美しい猫だ。

「単刀直入に言おう。今回我々が君に接触したのは、ある任務に君たち兄妹をまきこんでしまったからだ。その任務というのは…」

「ちょっと待て、」

俺の意思など無関係にさくさく話を進めていく猫の言葉を思わず遮る。

「今、俺たち兄妹といったな？」

「ああ、それは…」

ざわざわと胸が高鳴る。

「マジユをどうした！？返答次第では容赦しないッ…！」

焦りと怒りが混同して、何がなんだか分からない。

ただひとつだけはっきりしているのは、マジユが消えたことと目の前の2人組みがここにいないということだ。

「お前の妹には何もしていない。私たちがこちらへ来た時にはすでに手遅れだった。」

腕組みしながら話に耳を傾けていた少女が沈黙を破った。

よく見れば彼女の風体は奇妙というか奇抜というか…、とにかく異様だった。

どこかのSF映画で見たような原材料不明の衣服をまとっている。いかにも未来人っぽいイメージのボディースーツだ。

だがそれ以上に俺の目を引くのは少女そのものだった。

無造作に切られたショートヘアは老人のように真っ白く、同じように肌も透けるように白い。小さな顔にはめ込まれた瞳は紅く、まるでルビーを彷彿とさせた。

小柄な体軀はしかし、凜とした存在感を放っている。それは畏怖すら覚える美しさだった。

けれど、そんなことはどうでもいい。

「…手遅れだった？こちらに来たつてのはどういうことだ？マジユを消したのはお前らじゃないのか！？」

「手遅れとはつまり事後であつたということ。私たちはセカンドからこちらの世界、ファーストへやってきた。お前の妹を襲つたのは私たちが追跡しているターゲットだと推測される。」

こいつは律儀にも俺の質問すべてに答えているつもりなんだろうが残念ながらそれらは答えになっていない。

というか意味が分からない。

傍から見れば目の前の少女はただの真性コスプレイヤーだし、隣の猫はテレビ局がくいつきそうな世にも奇妙な人語を話すにゃんこだ。

「その…ファーストとか…セカンドってのはなんのことだ!？」

「ファーストとは非能力者たちの住まう世界。セカンドとは私たちを含めた能力者『アンプリファイア』の為に創られたもう一つの世界。」

「……………」

こいつは本当に俺を納得させる気があるのか？

いや、はなから納得させるつもりなどないだろう。

少女の淡白な表情からはどうせ説明してもお前には理解できまい、といった心情がうかがえる。

「彼女が言ったことはすべて真実なのだよ、ミアキ君。理解し難いだろうが、今君がいるこの世界とは異なる世界がたしかに存在している。アンプリファイアと呼ばれる特殊な能力をもった人間の世界、

それが即ち『セカンド』だ。」

自ら説明役を買ってでた猫がゆっくりと語りだす。

「セカンドの住人はみな、元々ファーストで暮らしていた普通の人間だ。能力者と非能力者とは共存できない。そのためセカンドを創り、世界をふたつに隔てた。ファースト側の人間にセカンドに関する情報は一切存在しない。だから君が信じられないのも無理はないんだ。」

握り締めた拳が、汗でじつとりと湿り気を帯びる。

俺は猫の話を笑い飛ばすことも嘆くことも忘れて、ただただこの状況を把握しようと躍起になっていた。

「…48時間前、私たちの組織が管理している施設から一人の能力者が逃走を謀った。速やかなるターゲットの保護が私たちに与えられた任務。おそらく、お前の妹を襲ったのは目標である『柳』という男だ。本来ならば、これは極秘任務。ファーストの人間に知られるわけにはいかないのだが、そうも言っていられない…」

少女は俯いて言いよどんだ。

「目標の能力は他人にも干渉してしまう厄介な力。一刻も早く保護したい。お前も妹を救いたいだろう？ 私たちに協力しろ。」

「何を…！」

協力？

まるで脅迫じゃないか。

ここ最近の体調不良といい、俺の人生は一体どうなっちまったっていうんだよ。

夢ならさっさと覚めてくれ。

「まあ、なにはともあれ、」猫が踏み出す。「活動は夜が明けてからにしよう。ミアキ君も詳しい話を聞きたいだろうし、いろいろと作戦も立てなければならぬからね。」

俺はもう、頷く事すらできずに立ち尽くしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0938e/>

オトシボシ

2011年1月15日02時44分発行